

に違ひないといふことになった。畑へゆく途中で出会ふ藤作が、顔をあからめて丁寧にあ挨拶しても、村人は疾病神にでも逢つたやうに急いで通り過ぎてしまふ。とうとう村中の相談で、懲しめのために藤作一家を三年間八兵衛（仲間はづし）にしてしまふことにした。藤作親子は今までの貧乏にもまして一層ひどい姿となった。

暮の一夜、藤作の一家が村を逃げたといふことがまた村中に伝はつた。彼奴もとうとう村に居られなくなつて、大方乞食でもするのだらう……。村人はやうやく忘れられか、つた藤作の悪事をまたこと新しく噂しあつたが、結局厄払ひをしたやうな軽い安心を覚えた。藤作の家の壊れか、つた流し元には、夜逃する夜食べ残したらしい蒟蒻の白和へが、ほんの少し竹の皮の上に、貧しい人の形見のやうに淋しく残されてゐた。

竹の皮の上に白和へが真黒になつてコチコチに固まり、村人が再び藤作夫婦の噂を忘れた頃にその住んだ家は取壊たれて、やがて村長の家の隠居所が建てられた。

また夏が来、秋が廻つてきた。この年もやつぱり少しづつの梨や瓜が盗まれたり稲が失なつたりした。無智な村人は愚痴をこぼしながらもせつせと働いてゐた。

ある年村長が都へ行った時ふと藤作に逢つた。藤作は米屋の番頭になつてゐた、かみさんもちゃんとした都の商人のおかみさんになつてゐた。一夜その家に泊つて世話になつた村長は、喜こんで村に帰ると、最先にこの思ひがけない話をした。村長が自慢気に語る藤作の話は村人は変な顔をして聞いてゐた。そ

れから度々村長の許へは長い手紙が藤作からきた。正月になると、村人の思ひもつかない上等の紙へ黒々と年頭の挨拶の連ねであるハガキが、村中の重だつた人々に届いた。仁三郎さんの家にも届いた、例の下男はまたハガキを持って方々に触れまはつた。長い間忘れられてゐた藤作の噂がまた立つた。かみさん達は落ちあふと、藤作のおかみさんの幸福を話しあつて、みな羨しきうな顔をして彼等の都住居の様子を想像してみた。しかし彼等には、幾年か前に村端れの簑陰の小さな家に住んでゐた泥と垢にまみれたみじめな彼等しか眼に浮ばなかつた。

春になると都には大きな博覧会が開かれた。新聞でその噂も村に伝はつてきた。昨秋のよかつた村の誰彼は思ひきつて一かたまりになつて、都見物かたぐい出掛けることになつた。村長からはそのむきを藤作に言つてやつて、村人の事を万端頼んだ。村人は藤作からの返事を待つて、返事があり次第出掛けるやうに、各々慣れない旅仕度を始めた。仁三郎さんもその一人に加つた。かの下男は毎日のやうに、町の紺屋へ染めにやつた地織の仁三郎さんの羽織を催促に行つては、藍壺の傍に腰を下して、藤作の出世の噂を我が事のやうに、誇りかに職人達に話してゐた。

(大正6年・曲水2-12)